№40

保存用

第8号

ほんきょうろ
本郷とは人類の本当の故郷（地上天国）という意味です。従って、本郷路とは地上天国実現のための道路です。
（題字は文鮮明師）

本郷路

昭和60年（1985年）8月1日発行

発行所　国際ハイウェイ建設事業団
東京都渋谷区道玄坂2－10－12
新大宗ビル3号館4F　TEL 03(496)2893

THE INTERNATIONAL HIGHWAY CONSTRUCTION CORPORATION

未来への道九州から出発

国際ハイウェイ・日韓トンネル研究会九州支部

建設へ大きく前進

第三回総会を盛大に開く

建設推進へ活気づく総会会場（博多市大手門会館）

国際ハイウェイプロジェクト・日韓トンネル研究会九州支部（支部長・高田源清九州大学名誉教授）は、七月六日、福岡中央区の大手門会館で第三回総会を開催した。九州は日韓トンネル建設の地元でもあり、これまでこのプロジェクトの推移に大きな期待がかけられ、活発な研究活動が行われていた。総会には九州全域から会員約二百名が参加し、建設推進にかける意気込みが会場全体に満ちあふれ熱気あふれる総会となった。

（第二・三面に関連記事）

総会に先立って青函トンネルの記録映画（日本鉄道建設公団提供）が上映され、世紀のトンネル工事の歴史がスクリーンで紹介された。

総会は、九州支部理事の鎌田泰彦氏（長崎大学教授）の司会で始まった。冒頭の挨拶に立った高田支部長は、三年間の研究成果を報告し、「今後、株式会社をつくって民間で建設を進めてゆきたい。このプロジェクトは実現へ向けて着実に動き始めている」と、トンネル建設運動の具体的進め方について抱負を語った。

次に研究会の佐々会長が挨拶に立ち、「韓国の協力を如何に得るかが技術的問題以上に困難、そのため九州の協力が必要」とトンネル建設のため、日韓交流の必要性と地元九州の重要性を訴えた。

更に国際ハイウェイ建設事業団理事長の梶栗玄太郎氏が「このプロジェクト推進には、不可能を可能にしてゆく挑戦心が必要」と、トンネル建設運動の心構えを述べ、九州がこの運動の先頭に立つよう要請した。

続いて高田支部長が議長に選出されて、五十九年度の活動報告と収支決算の報告がなされ満場一致で承認された。更に六十年度の活動計画と予算案及び新役員の選出が議事にかけられ賛成多数で承認された。

議事終了後、事業団制作のマルチビジョンが上映され、文鮮明師による国際ハイウェイ構想の提唱から現在に至るまでの活動記録がスクリーンで紹介された。

その後、日本生産性本部理事の西堀栄三郎氏によって「未知への挑戦」と題して、記念講演が行われた。西堀氏は、第一次南極越冬隊長や原子力開発の経験を踏まえながら、「未知の世界を切り開くには、絶対にやり通すという決意が必要」と、日韓トンネルの必要性を訴えながら建設推進へ、参加者全員の決意を促した。

最後に、九州支部参与の真崎寅二郎氏が閉会の辞を述べ、世界平和実現の為、ハイウェイ建設の早期着工を参加者全員で確認して締めくくった。

その後引き続いて懇親会がもたれ、林田秀文・九州東海大学教授の司会で、和やかさの中にも総会の熱気そのままに活気あふれる交流の場となった。そして大橋三郎・福岡県民教育協議会常任理事の音頭で万歳三唱を行い盛会のうちに終った。

理事長挨拶

日韓トンネル研究会九州支部第三回総会での挨拶より抜粋、要約。

歴史に残る偉業

国際ハイウェイ建設事業団理事長

梶栗　玄太郎

皆様方の御協力によりましてこの三年間、現地での調査活動が非常に進展してまいりました。心から感謝を申し上げます。

最近ある方に御会い致しまして、国際ハイウェイ・日韓トンネルについて説明しましたところ、最後に「絶対に不可能だよ」と言われました。それを聞いて私自身、今はそう思われていても将来、必ずその人の考え方を変えようと、非常な意気込みがわいてきた次第でございます。現在のところ、これが経済界の常識的見解ではないかと思います。従ってこのような大きなプロジェクトを云々するのは、常識を越えた人間と受けとられているわけでございます。ところが本日の九州支部総会には、こんなに大勢の方方が集まっておられます。

常識的な考え方ではこのような大きなプロジェクトは不可能でございます。従って最初から、不可能に挑戦してこれを可能にしてゆくという考え方でなければ、このプロジェクトは理解できません。そして、これほどやりがいのある事業はないわけでございます。私自身当初から、このプロジェクトに対して胸を踊らせ、夜も眠れないような夢を抱きながら今日に至っております。しかし今では、それが夢ではなく現実性を帯びてきているのであります。

当初、このプロジェクトに感動した青年達が活動を始めました。しかし経験の少ない青年達がやり始めたところ、青函トンネルを指導された佐々先生を初めとして、専門家の方々が参加して下さるようになりました。更に業界からも参加して頂きまして、本格的な活動が始まり、今日に至ったわけでございます。

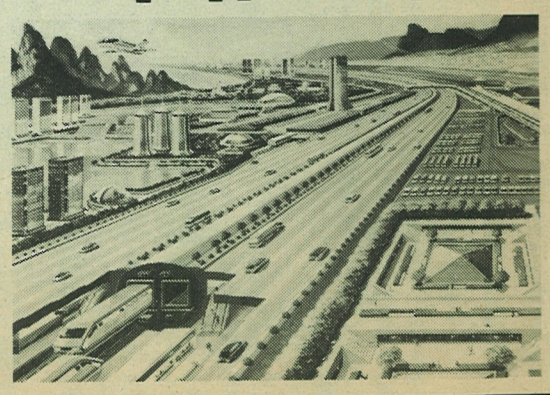
これから本格的にこの活動を推進し、必ず今世紀、新しい二十一世紀を迎えるまでに、着工し完成に近づけてゆきたいと考えています。このような意気込みで、今後この運動を推進してまいりたいと思っております。そして出来れば、今年中に斜坑建設まで進められたらと考えている次第です。

特に地元九州の先生方の御協力を得まして、国際的な道路を建設するという歴史に残る偉業を成し遂げてまいりたいと思いますので、御協力御理解をお願い致します。そして更にこのプロジェクトの先頭に立って、九州から始めて頂きたいと考えていますのでよろしくお願い致します。

自由公路

全長千六百㍍の大鳴門橋の開通によって、淡路島と四国に経済的活力がでてきた。本州四国連絡橋公団の予想通行量は、開通一年後に一日平均六千五百台であった。しかし開通後一カ月で既に九千七百台を記録した。道路による経済圏の結びつきは、相乗作用があるようだ◆ところで韓国と日本との間に道路ができたら、その活用状況はどうなるだろうか。きっと予想を超えた経済効果が生まれるに違いない。完成後の効果が正確に把握できるならば、事業推進はスムーズに進む。国際ハイウェイプロジェクトの効果の予想も具体的数字が必要となってきた◆そもそも海や川によって隔てられた場所が、道路で繋がることは、人類にとって必要欠くべからざることであった。人間の生活様式が変わらない限り、飛行機が発明された今日でも道路の重要性に少しも変化はない◆東京湾でも、川崎市と木更津市を結ぶプロジェクト（トンネルと橋）が急浮上している。十九年も前に、技術的な施工の可能性が確認されたが日の目をみなかった。内需振興、民間活力の利用がネックだったからだ◆国際ハイウェイプロジェクトは最初から国民一人一人の力で推進して行くもので、実現には遠いようで最も早いものといえるだろう。暑い日の続く中で、世界の避暑地に車で移動できる日の早いことを祈るものである。

平和の架け橋・国際ハイウェイプロジェクト



〔ご案内〕

ビデオ
- ◉「国際ハイウェイ」Ⅰ〈23分〉【日、英語】
- ◉「道」国際ハイウェイ・プロジェクト」〈30分〉【日、英語】
- ◉「本郷路」Ⅱ〈11分〉【日、英語】
- ◉「本郷路」Ⅲ〈23分〉【日、英語】

16ミリ
- ◉「道」国際ハイウェイ・プロジェクト〈30分〉

パンフレット
- ◉「国際ハイウェイ・プロジェクト」〈A4判、12頁 カラー〉
- ◉「国際ハイウェイ基本構想」〈A4判変型、40頁〉
- ◉「INTERNATIONAL HIGHWAY PROJECT」〈B5判、17頁〉【英語】

機関紙
- ◉「本郷路」〈タブロイド判4頁〉

●お申し込みお問い合せ ☎03-496-2893

国際ハイウェイ建設事業団
THE INTERNATIONAL HIGHWAY CONSTRUCTION CORPORATION

〒150 東京都渋谷区道玄坂2-10-12
新大宗ビル3号館4F
TEL 03-496-2893

平和の道実現近し

日韓トンネル建設の拠点となる九州では、八三年の研究会創立と同時に九州支部が設立された。そして、トンネルの地元としての地理的メリットを生かし、唐津・壱岐・対馬・大村に設置されている事業団の事務所と連絡を取りながら、海に陸に空に、さまざまな調査・研究活動を繰り広げてきた。総会では、目ざましい二年間の活動状況と今後の計画が各部会長によって報告されると、その進展状況の早さに会場から驚きの声があがった。そして会場全体が、夢が現実へ近づいてくるような雰囲気の中で盛り上がっていった。懇親会では、九州がトンネル建設の先頭に立ってゆこうと、激励のメッセージが相次ぎ、早期実現への熱気を残しながら終った。

日韓トンネル研究会九州支部
第3回総会

九州がトンネル建設の先頭に立つことを確認し合った（懇親会会場で）

総会当日、博多は鎌倉時代から続く勇壮な博多祇園山笠で市内中が沸き立っていた。そして総会も山笠の熱気そのままに、世紀のプロジェクトを九州から出発させようと大きく盛り上がっていった。

「私達も、日韓トンネル建設株式会社の最初の株主となって建設を推進してゆきましょう」と、高田支部長が民間での建設推進を訴えると、二百名を超す参加者から大きな拍手があがった。

古代から、九州は大陸文化伝達の日本側窓口であった。大陸の高度な文化・技術は韓国から対馬海峡を渡り、先ず九州の地へ伝えられ日本全国へと広がっていった。そのため韓国と九州は、歴史的に密接な関わりあいをもってきた。日韓トンネルに対する九州の人々の期待は、単に経済的な理由だけでなくもっと深い所から生じているようであった。

佐々会長も、「韓国側の協力を得るためには九州の協力が必要」と呼びかけ、文鮮明師が提唱したハイウェイ構想の背後には、世界平和実現の理想が流れていることを強調した。

次に挨拶に立った事業団の梶栗理事長も、「二十一世紀を迎えるまでに、トンネルを完成に近づけてゆきたい。そのため出来れば年内にも試験斜坑の建設に取りかかりたい」と、建設推進に対する強い意欲を示し、九州の全面的な協力を訴えた。

議事に移り、各部会長から一年間の各部会活動報告と今年度の計画が報告された。

政策・経済等の問題を担当する第一部会は高田源清部会長が、「今年度は、第二・三部会で決定されたトンネルの予想ルートに沿って、関連地域の政治・経済などを詳しく調査してゆきたい」と、地域に根ざしたトンネル建設の抱負を語った。

地形・地質等を担当する第二部会は山崎達雄部会長が、「トンネルは九州北部に分布する石炭層を貫いてゆくが、九州は炭坑経験者も多く十分掘削可能。今後は、ルート上の地質層序と構造そして全域に分布する火成岩を詳しく調査し、トンネル掘削のための詳細なデーターを提示してゆきたい」と、トンネル掘削に対する自信を語った。

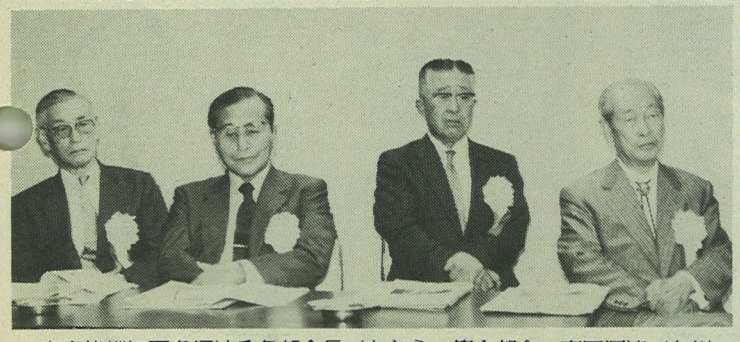
設計・施工を担当する第三部会は兼重修部会長が、「今年度は、東京で研究されてきた項目に検討を加えてゆくと共に、試験斜坑建設のため具体的な斜坑計画及び立坑計画を進めてゆきたい」と語った。

環境問題を検討する第四部会は表俊一郎部会長が、「これまで、陸域、海域部の環境・気象問題から、地震の調査研究にいたるまで幅広い調査活動を行ってきたが、今年度はこれまでの研究成果を踏まえて、更に詳細な調査活動を行ってゆきたい」と報告した。

その後、役員の選出が行われ、田代信雄・西日本技術開発㈱社長ら八名が新たに役員として九州支部の運営に携わることになった。

議事終了後、国際ハイウェイの提唱から現在まで、三年間の活動がマルチビジョンによって紹介され、唐津、壱岐、対馬、大村の各現場事務所を中心とした現地活動がスクリーンに写し出された。陸・海・空と最新の技術を駆使して繰り広げられる調査活動に、着実に進められているという意識が広がり、会場全体にトンネル建設の足音が押し寄せていった。

活気づく九州総会
建設へ確かな手ごたえ


来賓挨拶に耳を傾ける各部会長（右から、第1部会・高田源清（九州大学名誉教授）、第2部会・山崎達雄（九州大学名誉教授）、第3部会・兼重修（熊本大学名誉教授）、第4部会・表俊一郎（九州産業大学教授））

記念講演に立った西堀氏も、「二十一世紀に向けて、日本は離島から大陸の一員になってゆかなければならない」と、日韓トンネルの必要性を訴え、国民一人一人の力を結集してこのプロジェクトを進めてゆこうと呼びかけた。

九州支部参与の真崎寅二郎氏の閉会の辞で総会は終り、続いて懇親会がもたれた。懇親会は、中富正義・久光製薬㈱会長、黒木一夫・㈱寿工務店顧問の挨拶のあと村上良丸・宮崎大学教授の乾杯の音頭で始まった。会が進むにつれて、建設推進を訴える来賓の祝辞が相次ぎ、会場は熱気で満たされていった。そして会場の至るところで、部会委員を囲んで今後の研究方針についての議論が交わされ、懇親会は大きく盛り上がっていった。

最後に大橋三郎・福岡県民教育協議会常任理事が、「この構想は、全人類の幸福を願う文鮮明師の宗教的思想から出発している。神が与えたプロジェクトなので必ず実現する」と訴え、大橋氏の音頭で万歳三唱を行った。そして、九州が建設推進のために中心になってゆくことを確認して閉会した。

総会終了後、佐々会長及び西堀氏は、トンネル建設の拠点となる対馬、壱岐、佐賀市で開催された懇親会に出席した。そして総会の熱気そのままに、力強くトンネル建設の必要性を訴え、地元の協力を要請していった。

やがて九州からトンネル建設推進の機運が全国、全世界へ広まり、文鮮明師の世界平和の理想が大きく実現へ向けて歩み出してゆくことであろう。

主催者・来賓あいさつ

民間の力で建設を
九州支部支部長　高田源清

日韓トンネルの調査が開始されてから約三年になりますが、その間、青函トンネルの建設に携わってこられた佐々会長の指導のもとで、さまざまな基礎調査が進められてきました。

日韓トンネルは青函の四倍の長さでありますが、途中に壱岐・対馬があって、青函の四倍の技術的困難さが伴うという訳ではありません。私達日本人が決意し、決断すれば、技術的にも経済的にも十分建設可能であります。

私の専門は商法なので、その方向からトンネル建設の具体的な進め方について考えている訳ですが、最終的には株式会社をつくり民間で建設を開始してゆきたいと考えています。私もこの株式会社の最初の株主になって、一歩一歩実現へ近づけてゆきたいという希望をもっています。

今日は、九州支部第三回目の総会ですが、次の総会には更に大きな会場で盛大に開催できるのではと期待しております。

世界が一つに
久光製薬㈱会長　中富正義

世界にも例のない大プロジェクトに、大きな夢をかけている一人であります。総ての物事は最初、何もないところから出発して発展してゆく訳でございます。

本四架橋では、淡路島と四国が結ばれ本州と一つになろうとしています。そしてやがては、世界が大きな橋で一つに結ばれてゆくだろうと思われます。次々と世界が結ばれようとしている今日、隣同士の日本と韓国が陸続きになっていないのが不思議です。

皆様と共に大きな夢をもって、日韓トンネル実現のためにこの運動を盛り上げ、建設推進に努力してゆきたいと存じます。

実現の時期を短縮
㈱寿工務店顧問　黒木一夫

頂度今、博多は山笠シーズンで活気づいています。そして私達も二十一世紀に向けて大きな希望と期待を抱きつつ、未知への挑戦を続けてゆきたいと張り切っています。

このプロジェクトにはたくさんの賛同者がいます。それを核として、この計画が成し遂げられない筈はないと思う次第です。そしてその実現の時期を縮めてゆくのが、私達の役目だと思っております。

今後も皆様と共に、東京からロンドンに至るハイウェイ建設に向けて頑張ってゆきたいと思います。本日はおめでとうございました。

韓国の協力が必要
日韓トンネル研究会会長　佐々保雄

研究会の総会も今年で三回目を迎えました。その間、皆様の多大なる御協力を得ましたことを感謝致します。

また技術以上に困難な問題は、韓国の協力を如何にして得るかということであります。韓国の人々は、日本に対して私達の想像以上に心情的にしっかりをもっています。そのためにも韓国に最も近い九州の皆様の御協力を是非ともお願いしたいと存じます。

私達は、単にトンネルを掘ることを目的としておりません。文鮮明師のハイウェイ提唱の理念である世界平和を築くため、背骨としてのハイウェイ建設、トンネル建設が私達の理想であります。是非この理念を理解して頂きまして、日韓トンネルの研究、建設推進に九州の皆様の御協力をお願いしたいと存じます。

実現を確信
宮崎大学教授　村上良丸

これまで私は、関門道路トンネルに始まり、現在脚光を浴びてきた東京湾横断道路の沈埋トンネルに至るまで、一連のトンネル計画を手がけてまいりました。その総距離は十五キロ程になりますが、これは対馬海峡の下を通る日韓トンネルの前奏曲になるだろうと思っています。

私も西堀先生同様、このプロジェクトは必ず実現すると確信しております。またここには若い方々がたくさん参加されており、大変力強く感じています。日韓トンネルが早期に実現することを共に祈ってゆきたいと思います。

高邁な理想で推進
九州支部参与　真崎寅二郎

諸先生方からの御高説を拝聴致しまして、私も研究会の一員として非常に感銘いたしております。

国際ハイウェイ建設を通して、世界を一つにしてゆくという高邁な理想のもとに日韓トンネルの建設が、推進されていると私自身も確信いたしております。この総会を契機として、トンネル建設推進に皆様の絶大なる御協力をお願いしたいと思います。本日はありがとうございました。

宗教的思想から出発
福岡県民教育協議会常任理事　大橋三郎

今日まで、数多くのプロジェクトが計画され実施に移されてきました。そして現在でも多くのプロジェクトが計画されています。しかし技術的なものを動機として出発したプロジェクトはどれも失敗に終っています。

この国際ハイウェイ構想及び日韓トンネル計画は、全人類の幸福と繁栄を願う文鮮明師の深遠な宗教的思想から出発しています。まさに神によって与えられたプロジェクトといえます。だから私は、いかなる困難があろうとも必ず成就すると確信しているのであります。

歴史的事業への期待

未知への挑戦

記念講演

日韓トンネル研究会九州支部第三回総会での記念講演より抜粋、要約。
（文責・編集部）

日本生産性本部理事
西堀　栄三郎

今日、世界の将来を考える時、日本は大陸から離れた単なる離島にしかすぎないことを痛感致します。この離島が日韓トンネルによって陸続きになる。その時初めて日本は、欧州を含めたアジア大陸の一員になってゆくのです。離れているのがいいと言う方もあるかもしれませんが、それはあまりにも小さい、エゴイスティックな考え方です。私は、これから世界の一員になるためには、大陸とつながらなければ意味がないと感じております。

もちろん日韓トンネルの実現には多大な困難が伴います。技術や資金の問題、更には政治的問題と、あらゆる面において困難は目に見えています。しかし困難だからといってやらなければ、素晴らしいことを実現することは不可能になってしまいます。あの青函トンネルは、世界で最も掘削困難な地質であり、高度な技術を必要としたことが、貫通後初めてわかりました。それが成功したということは、そこに深い経験と知識、能力があったことを立派に証明したことになるのです。日韓トンネルも違った意味での技術的困難がありましょうけれども、必ず克服する道があります。言い方を換えますと、困難があっても不可能ではないということであります。

マクロ的思考で

現在私は、㈳日本工業技術振興協会の会長を務めております。その中にマクロエンジニアリング部会があり、一橋大学の中川学教授が部会長となって研究を続けています。ここでは、ドーバー海峡トンネルや宇宙開発等の巨大プロジェクトの進め方を一般的な問題として研究しております。日韓トンネルも数多いマクロプロジェクトの一つでありますが、その中でも一番早く計画が発表されたものだと私は考えております。

考えてみると、マクロエンジニアリングにしても、一企業の出発にしても、その未来については全く予想がつきません。どんなに未来工学を研究しても、未来を正確に予言することは不可能なのです。従って未来は未知であります。しかし未知の世界の中に真実が秘んでいるのです。その未知の問題を乗り越えて人類は永遠に生きていかなければなりません。結局、未知なるものに取り組む心構えがマクロ的思考ではないかと思います。

南極へ出発する時

私自身これまで山登りもし、南極にも行き、原子力の研究や真空の研究にも携わってきました。これら幾多の未知の世界を探険して考えてみると、未知の問題に挑戦するにあたって一番大事なことは、「絶対にやる」という決心をすることなのです。もちろん計算し調査し、準備には徹底的な努力をばらわなければなりません。そして決意したら、どんな困難な問題が出てもやり抜く。困難はみんなで力を合わせて克服してゆくしかありません。

私が南極にまいります時、具体的な生活については私に一任されましたので、考えられる総てのことを考え一年間準備に没頭しました。そしていよいよ出発する日の朝、何か忘れているものがたくさんあるような気がして仕方がありませんでした。しかし忘れている品物があってももう買いに行くことはできません。心が落ち着かなくなりましたがその時ふと考えました。

「人間には、何もなくても成し遂げることのできる創意工夫という大きな能力が与えられている。それに我々は、悪いことをしているのではなく、日本全国から大きな支援を受け、子供からお年寄りに至るまで期待をかけられて出発しようとしている。だから困難にぶつかった時には、必ずそれを克服する道が開けるに違いない。」そうすると心がスカッと晴れ渡り、心配げな隊員とその家族に励ますゆとりすらも出てきました。これは単なる一つの出来事ですが、物事というのはそういうものだと思います。

人々の支援を受ける

日韓トンネルにおいても、やるという決意をした後、徹底的に調査・研究が行われているに違いありません。そしてこの三年間の努力の成果は、次の段階へのきっかけとなってゆくのです。更に大事なことは、大勢の方方の支援を受けているということです。それがこのプロジェクトの成功か否かの別れ道になってゆくと思われます。幸い今日は、会場に溢れんばかりの方方が参加しておられます。そして来年には倍、その次の年にはその倍と増え、恐らく日本国民がこれに対して賛成して頂けるに違いないと思います。日本が、いつまでも大陸から離れた孤島でよいのかどうか反省した時、日本人全員が世界の一員として、一つの道によってつながることを考えなければならないと思います。

未来への貢献

貫通した青函トンネルについて、経済的に成り立つのか否か問題になっていると聞いております。しかしそんなことは目先だけの話ではないでしょうか。青函トンネルは子々孫々にわたって永久に残ってゆくのです。これから先の長い日本の未来を考えた時、一年、十年で儲かるとか儲からないとか考えるのは、あまりにも短絡的ではないでしょうか。

私達の一生は本当に短いものです。しかし一人一人が、何か一つでも未来に対して貢献するという気持ちを持ったとしたら、その積み重ねによって、非常に大きな実が結ばれてゆくと思います。アメ玉一個を買うお金を節約して寄付して下さった子供達によって、南極越冬は成功したのです。皆さん方がそういう気持ちを少しでも持って頂いたら、私は日韓トンネルは必ず成功すると思います。そして恐らく子々孫々が先祖はよくやってくれたと感謝するに違いありません。

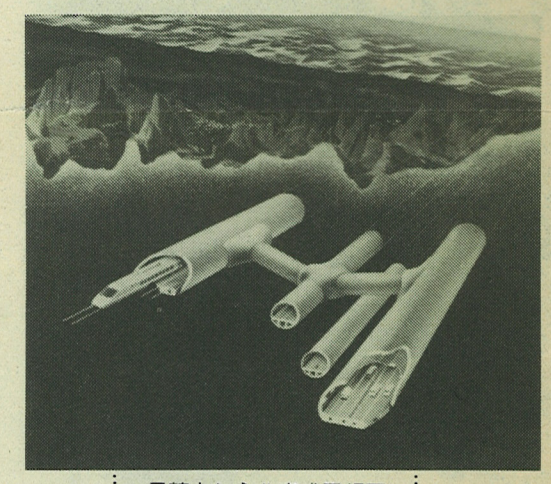
民間の力で建設

日韓トンネルのような大事業では、技術と資金が必要となります。幸い技術はすでに青函トンネルで証明済みです。資金については、先程高田先生が「民間でやってゆこう」と述べておられますが、このことは非常に貴いことだと思います。日本の国民一人一人が日韓トンネルのために投資したとすれば、子々孫々から喜ばれ、また韓国を始めとして世界の人達からも、日本人に対する大きな感謝の念と信頼を獲得することが出来ると思います。中川教授も不可能ではないと言っておられます。私もここで「必ず実現する」と断言致します。いつ完成するか断言でませんが、着実に進んでゆくことでしょう。

今後の日本を考える時、環境問題などを考慮すると、交通機関・工場施設等は地下を利用するしかないと思います。幸いそのための技術は大きく発展してきておりますし、それによって関連技術が大きく進歩してゆきます。

皆様方も雄大なロマンと大きな理念を持って仕事に、地域の発展に、また日本の将来に取り組んでゆかれます様お願い致します。

ロマンで未知の世界克服し
人類の未来に大きく貢献を



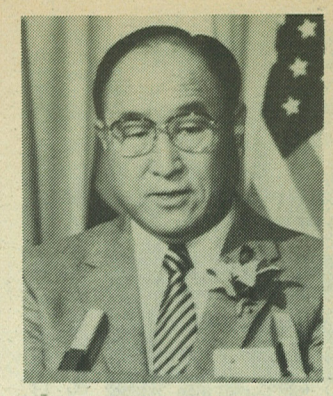
日韓トンネル完成予想図

〈プロフィール〉

明治三十六年、京都府に生れる。昭和三年京都大学理学部卒。京都大学・東海大学教授、日本原子力研究所・日本原子力船開発事業団各理事。昭和二十八年ヤルンカン登頂・昭和二十九年マナスル偵察・昭和三十一年南極観測隊第一次越冬隊長。尚日本山岳会・日本ネパール協会各会長を務む。理学博士。現在、日本工業技術振興協会会長、日本生産性本部理事、日本規格協会顧問、日韓トンネル研究会顧問。

提唱者の言葉

第六回科学の統一に関する国際会議（一九七七年）の講演より抜粋。



国際文化財団創設者
文鮮明師

価値基準の探求

学問の目的と方向性

私は宗教指導者として、また科学者として、科学と同様に宗教と哲学に長い間関心を持ってまいりました。このような科学者の会議を始めたのはそのためです。永遠の真理探求に携わる人であろうと、現象の観察に携わる人であろうと、その異なる学問分野の間にはある関係が存在すると私は思います。実際、超越的な実在との関係なしに、時間的空間的に何らかの結果が起こり得るでありましょうか。

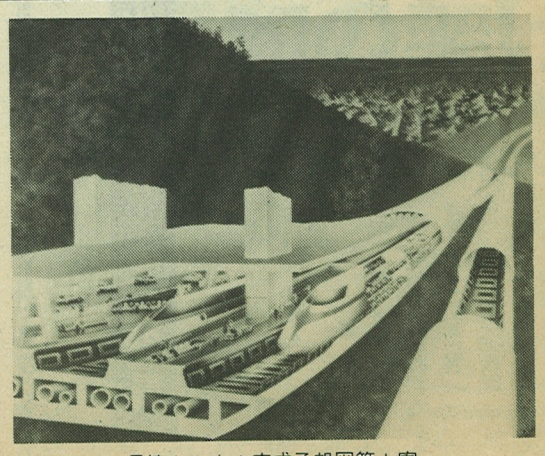
宗教と哲学は、人間の良心が長い間苦悶し考えぬいてきた、形而上学的で、倫理的な問題に関係するものであります。私達人間はどこからきたのか？人間の苦悩の原因は何か？何が善で何が悪か？死後の世界はあるのか？これらの疑問は、私達の学問分野が何であれ、皆等しく関心を持つところであります。

科学は、宇宙の法則、時空内の出来事を理解するものとして、それ自身に限界があります。周知のように、科学はこの二、三百年の間に、学問的には急激な発展を遂げてきました。しかし、科学を導く価値基準なしには、科学は破壊的なものとなる可能性があります。核戦争の可能性はこの事を証明しています。いままでの会議と同様に、今回の会議のテーマは「価値の基準と科学との関係」となっております。

私の考えでは、神学から自然科学までの全学問は、明確な目的と方向性がなければ、意味がありません。価値の基準を求めるという事は、この目的を探求する事に他なりません。このような一般的な研究において、異なる分野であれすべての学問は互いに関連性を持っています。真の学問が相反することはあり得ません。実際、ある分野での新しい発見は他の分野での研究に重要な影響を与えたかも知れないのです。

今世紀、実用科学はあらゆる分野で、学問を探求する個人の信念や行動に絶大な影響を与えてきました。たとえば相対性理論や不確定原理は多くは間違って理解されましたが、しかしまた疑いなく、哲学や神学に大きな影響を与えてきました。

研究分野が広範であっても、その研究者が自分の分野に関心を持つ学者達としか関りを持たないというのは残念な事であります。専門にこだわっては、他の探求者に対してほとんど価値のない知識しか与えられないのです。発見した喜びは、その発見を他の学者達が理解できる表現で伝え、広げるべきです。私達の知識が上ずりで不正確にならないように、私達は進んでそれを聞くべきであります。



日韓トンネル完成予想図第１案

国際ハイウェイプロジェクト・日韓トンネル研究会

◉「日韓トンネル時報」〈B5判〉……500円（送料込）
◉「日韓トンネル研究」〈B5判〉……2,000円（送料別）
●振り込み先
三菱銀行渋谷支店（普）5986474　振替　東京8-143133
●お申し込み先
☎03-496-9211

国際ハイウェイプロジェクト
日韓トンネル研究会

〒150 東京都渋谷区道玄坂2-10-12
新大宗ビル３号館930号室　電話03-496-9211（代表）

会員募集

1. 正会員
年額　1口　5,000円
2. 賛助会員
年額　個人　1口　10,000円以上
年額　法人　1口　50,000円以上

建設推進の輪広がる

現地ルポ

九州の協力を訴える

佐々・西堀両氏を囲み 地元有識者の集い開催

九州支部第三回総会の終了後、佐々保雄・日韓トンネル研究会会長及び西堀栄三郎・日本生産性本部理事の両氏は、日韓トンネル建設の拠点となる対馬、壱岐、佐賀市を訪れ、地元有識者を集めて開催された懇親会に参加した。なお対馬での懇親会には、九州支部長の高田源清氏と事業団理事長の梶栗玄太郎氏も参加し、トンネル計画をめぐって活発な質疑応答がなされた。佐々・西堀両氏は、日韓トンネル計画の現状を説明し、建設実現に地元の協力を強く訴えていった。今回は、九州現地での懇親会のもようをレポートしてゆく。

▲ 対馬懇親会では活発な質疑応答がなされた

▲ 唐津斜坑予定地を視察する佐々・西堀両氏

◇対馬での懇親会

七月七日、対馬空港に到着した佐々・西堀両氏らは先ず、事業団の対馬事務所を訪れた。事務所では柏葉芳孝所長らが出迎え、調査活動の概要と今後の計画、予定ルートについての説明を行った。この日対馬では、十日間続いた激しい雨もあがり、太陽が久々に顔を出していた。

懇親会は対馬交通ホテルで開かれ、梅野貞省・上対馬町長、長郷哲夫・豊玉町長ら約三十名が参加した。研究会九州支部理事の三山忠氏の司会で始まり、最初に高田支部長が挨拶に立ち「日韓トンネルは対馬の開発に大きく寄与するだけでなく、世界平和にも貢献してゆく」と日韓トンネルの意義を語った。

梶栗理事長も国際ハイウェイ構想の概要を紹介し、「さまざまな国際的問題を解決しながら、一歩一歩着実に進めてゆきたい」と抱負を語り、理解と協力を求めた。

講演にはいり西堀氏は、原子力開発での経験を紹介しながら、「ビックプロジェクトで最も大事なことは地元の協力を得ることだ。トンネル開通によって、対馬の存在が大きくクローズアップされてくる」と、日本と韓国の間に位置する対馬の地理的重要性を強調し、建設推進運動の中心に立つよう呼びかけた。

更に佐々会長も、研究会の概要とこれまでの研究成果を紹介し、専門家の立場から、予想されるトンネルルートや工事概要について説明を行った。

それを受けて、梅野、長郷両町長が、「これまで計画の概要は聞いていたが、あまりに早い進展状況に驚いている。早期実現のため、地元としても最大限の協力をしたい」と語り、トンネル建設に大きな期待を示すと共に全面的な協力を約束した。

その後参加者から、ルートや資金の問題などトンネル計画に対する具体的な質問が相次ぎ、佐々会長らがそれに答えて活発な懇親の場となった。

懇親会終了後、佐々・西堀両氏は、三月に設置された地震観測所や立坑候補地を視察した。

◇壱岐での懇親会

翌日、佐々・西堀両氏は、空路、壱岐へ向った。壱岐空港で松村誓八所長らの出迎えを受け、両氏は調査活動の拠点である壱岐事務所を訪れた。そして、これまでの調査活動の説明を受けたあと、松村所長の案内で島内を回り、ボーリング現場と力学試験設備やボーリングコアを収納している倉庫を視察した。

懇親会は郷ノ浦港を眺めるホテルアイランドで行われ、山口定徳・芦辺町長、立石武・石田町長ら約三十名が参加した。司法書士の坂口義臣氏の司会で始まり、食事を交えた和やかな会となった。

席上佐々会長は、ハイウェイ構想の背後に流れる人類愛の思想を語り、トンネル建設が世界平和実現の背骨であることを強調し、壱岐がトンネル建設の重要な拠点であり、地元の協力が実現への鍵であることを訴えていった。

西堀氏もマクロ的思考法を説明しながら、「困難ではあるが不可能なプロジェクトではない。大規模プロジェクトは、最初の取りかかりが最も困難であり、最も重要である。日韓トンネルは、事業団によって着実に基礎調査が進められており、民間で十分実現が可能となってきている」と、実現の可能性について力強く語った。

その後懇親の場となり、参加者から資金、ルートの問題や橋梁の可能性そして着工の時期等具体的な質問が相次ぎ、トンネル建設にかける地元の期待と意気込みがうかがえた。

参加者を代表して山口町長が挨拶し、「九州と壱岐を結ぶトンネルは壱岐島民の夢であった。この計画も最初は信じられなかったが、着々と実現に向っていることが理解できた。壱岐がトンネル建設の中核になってゆき、更にこれが世界平和につながるなら、私達も出来る限りの協力をしたい」と語り、建設推進への協力を約束した。

▲ 佐賀での懇親会には地元有識者が多数参加した

◀ 対馬事務所で活動報告を受ける

▶ 壱岐では建設推進へ全面的な協力を約束した

◇佐賀での懇親会

九日、佐々・西堀両氏はフェリーで壱岐から呼子に渡った。藤橋健次・唐津事務所長らの出迎えを受け早速、唐津の斜坑予定地を視察した。遠く壱岐を望む風光明媚な土地では、具体的に斜坑建設の準備が進められていた。その後唐津事務所を訪れ、これまでの活動状況の説明を受けて佐賀市へ向った。

懇親会は佐賀市内のホテルニューオータニ佐賀で開かれ、雨の中を宮崎善吾・佐賀県経済調査協会専務理事や中富正義・久光製薬㈱会長ら約四十名が参加した。原美輝雄・研究会事務局長の司会で始まり、最初に副支部長の山崎達雄・九産大教授が挨拶に立った。山崎氏はトンネル計画の概要と、これまでの研究成果を報告しながら、夢ではなく現実に進展しているプロジェクトであることを強調した。

次に佐々会長が挨拶に立ち、国際ハイウェイ構想の概要を説明しながら、「夢のような計画と信用しない人もいるが、青函トンネルの時も最初、本気にする人は少なかった。現在、概査が終了し今年度中にルートを決定して精査を行ってゆきたい」と力強く語り、世界平和実現のためのハイウェイ構想であることを強調し、地元の理解と協力を求めた。

西堀氏も「非常識と思われる中で創造性が生まれ、やがて大きな国民的同意を得るようになる。早期に実現することが重要であり、そのためにも地元の協力が必要」と、建設実現にかける意気込みを語った。

その後テーブルを囲んで懇談となり、打ち解けた和やかな雰囲気の中で熱心に意見が交換された。そして参加者の中から、早期実現を願う声が相次ぎ、大きな盛り上がりの中で終った。

三日間の懇親会を終えて佐々会長は、「トンネル建設に対する地元九州の期待の大きさが実感できた。今後も、九州の方々と力を合わせて建設推進に努力してゆきたい」と、抱負を語っていた。

日韓トンネル研究会九州支部役員

〈支部長〉
高田　源清　九州大学名誉教授

〈副支部長〉
賀来　宗光　長崎県賀来病院医院長
兼重　修　熊本大学名誉教授
中富　正義　久光製薬㈱会長
山崎　達雄　九州大学名誉教授

〈顧問〉
太田　誠一　衆議院議員
三原　朝雄　衆議院議員

〈参与〉
黒木　一夫　㈱寿工務店顧問
田口　昭二　平戸商工会議所会頭
☆田代　信雄　西日本技術開発㈱社長
真崎寅二郎　貝島炭礦㈱管財人
☆溝口　寅彦　西日本短期大学理事
宮崎　善吾　佐賀県経済調査協会専務理事
山崎　鋤秋　富士ピーエスコンクリート㈱社長

〈監事〉
谷本　二郎　弁護士
☆大橋　三郎　県民教育協議会常任理事

〈理事〉
相原安津夫　九州大学助教授
石堂　稔　九州産業大学教授
☆伊東　尚美　日本地研㈱社長
大内　和臣　西南学院大学教授
表　俊一郎　九州産業大学教授
梶山　茂　共立病院医院長
鎌田　泰彦　長崎大学教授
唐木田芳文　西南学院大学教授
川上宏二郎　西南学院大学教授
久保為久磨　長崎大学名誉教授
小出　惣一　佐世保漁業組合相談役
☆近藤　満雄　九州産業大学教授
坂上　務　九州大学名誉教授
白水伊久男　㈲本田技術開発コンサルタント顧問
高橋　清　長崎大学教授
西田　正　九州大学教授
細川　潔　福岡大学教授
松尾　千秋　弁護士
三山　忠　自由民主党対馬連絡協議会会長
☆光吉　健次　九州大学教授
武藤　正行　国士舘大学客員教授
☆村上　良丸　宮崎大学教授
保田　正人　長崎大学学長
☆山内　豊聡　九州大学名誉教授
渡辺　尊　佐賀県農業共済組合連合会会長

〈アイウエオ順〉
☆印は新役員を示す
〈昭和六十年八月一日現在〉